



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほか、あなたがたの存じぶックスで、どんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお思いですか。この本には、一字でも誤植がないように願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

みんなみの巖のはてに — 沖縄の遺書 —

昭和34年4月10日 初版発行

¥ 150

編者	金 城 和 彦
	東京都練馬区谷原町1-214
発行者	小 原 正 雄
	東京都世田谷区新町1-156
印刷者	神 吉 晴 夫
	山 元 正 宜

東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光 文 社
振替 東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 [関川製本]
表紙の模様・意匠登録 116613

© Kazuhiko Kinzyo & Masao Ohara 1959

みんなみの巖いわおのはてに
— 沖縄の遺書 —

小お金きん

原はら城じょう

正まさ和かず

雄お彦ひこ

編



商標登録 467067

まえがき

この本は、いまから十余年前、太平洋戦争最後の激戦地であった沖縄における学徒たちの行動を、生き残りの人たちがありのままに綴ったものです。

戦争の是非はここにふれないとして、今でいえばティンエイジャーであった彼らが、国を思い、郷土を愛し、死をもって勇戦奮闘した純情は、尊いものであると思います。それは、わが国の歴史に不滅のものとして残し、子や孫にまで語りつたえらるべきものであると信じています。

世界の歴史をひもといってみても、このような悲惨な最期をとげた学徒たちが、どこの国にあつたでしょうか。殉国の至情に燃え、祖国日本の栄光を信じた彼らは、喜んで本土の防波堤となり、八千万同胞を身をもって守護してくれた防人ではなかったでしょうか。

私の妹信子、貞子の二人も、「卒業証書は靖国神社の入場券です。」と言いながら、野戦看護婦としてひめゆり部隊に参加し、ほほえんでとうとう不帰の客になってしまいました。また九死に一生を得た父母は、変わり果てた戦野に立って亡き学徒たちの名を呼びながら、「ひめゆりの塔」「健児の塔」「魂魄こんぱくの塔」などをつぎつぎと建てました。父母がこれらの塔を建てた終戦直後のこ

ろは、愁々^{しゆうしゆう}として声なき戦場のあとには、至るところに死体が散乱していました。しかし米軍ははじめ死体を祀^{まつ}ることを許しませんでした。そのような中で、父母は身の危険を忘れ、「死んだ仏を祀^{まつ}ることは、生き残ったものの道である」との堅い信念をもって、死体を集めて塔を建て、丁重に祀^{まつ}りました。「魂魄の塔」にはアメリカの軍人も多数祀^{まつ}られています。父は「私はいつでも十七万の英霊を背負っている。」と今でも口ぐせのように言っていますが、現在沖縄遺族連合会の事務局長をして、祈りの生活にはいっています。

私は沖縄出身の一人として、何とかしてこの学徒たちの行動を記録に残して後世に伝えたいと朝な夕なに念じていました。やっとのことで昭和二十六年に沖縄に帰る機会を得ましたので早速資料を集めにかかりました。しかし風うらうらとして寒く一木一草に至るまで国に殉じた沖縄の山河には、何ものも残っていなかったのです。私は懸命になって生き残った学徒や関係者を探しました。しかしほとんどが死んでしまっているのです、なかなか見当たらず、そのうちに許された沖縄滞在の時間は刻々と過ぎていきました。やっとのことで一中健児隊の国吉君^{くによし}や疎開学童の阿波連さん^{あへん}や梯梧部隊^{ていご}の佐久真さんなどに会えた時の喜びは、今でも忘れられません。夜のふけるのも忘れて私は話をききました。そして書いてくれるようにたのみました。それからというもの、必死になって資料や写真を集めたり、遺書をお預かりしたり、いろいろと手をつくしました。いくつかの学徒隊の記録がまとまるまでには、実に三年余りの月日を要したのです。

ある日、私は「ひめゆりの塔」という映画をみました。見ているうちに、ストーリーが事実と相当ちがっていることがわかりました。映画ですから、必ずしも事実そのままでなければならぬということはないでしょうが、やはり沖縄の学徒たちの真実の姿であるこの記録を、一日も早く世にだしたいと思っていました。しかし、もともと出版をめあてにして記録を集めたわけではなく、やむにやまれない気持で集めたので、発行の機会はなかなかやってきませんでした。たまに昨秋、朝日新聞東京本社社会部の小原正雄氏おはらまさおが疎開船で亡くなった学童たちを祀る「小桜の塔」のことで私に話をききにこられました。そのとき、この記録のことを話しましたところ、ぜひ読ませてほしいといわれ、原稿用紙にして二千枚ほどのものを持ち帰られました。数日して、「読んでいるうちに泣けてしかたなかった。ぜひ世に問うては……。」といわれ、光文社出版局の塩浜方美氏しおはまやすみを紹介してくださいました。この本が刊行されるまでご尽力くださった両氏に深い謝意をあらわすとともに、またこの記録に対して、終始絶大なるご協力を寄せられた仲宗根政善先生なかそねせいぜん、外間政章先生ほかませいしょう、金城宏吉先生きんじようこうきち、与那覇政男先生よなはまさお、久高友章氏くたかとともあき、藤野ふぢゑ先生ふじのをはじめ、生存者生徒諸君に心からお礼を申し上げるしだいです。

最後に、今は亡き草葉のかげの学徒たちのご冥福めいふくを祈り、合掌しつつ筆をおきます。

昭和三十四年三月

東京都練馬区谷原町一ノ二二四の自宅にて

金城和彦きんじようかずひこ

編集の仕方について

金城さんが集めた資料は、四百字詰の原稿用紙にして二千枚ほど、それに写真が百数十枚あった。学徒隊の記録は、「ひめゆり部隊」（師範学校女子部・県立一高女）、「鉄血勤皇隊」（師範学校男子部・県立一中）、「梯梧部隊」（昭和高女）、「積徳部隊」（家政高女）、「白梅部隊」（県立二高女）、「瑞泉部隊」（県立首里高女）などがあって、それぞれ戦闘のはじまる前から米軍に収容されるまでのことを書いていたので、いきおい重複しているところがあった。

そこで、まず女子学徒隊の記録を第一部にまとめ、第二部に男子学徒隊の記録をあつめ、第三部には九州に疎開する船で遭難した学童の記録と、県民の代表的な一例として慶良間列島渡嘉敷島のものをのせた。

全学徒隊の記録をそのまま載せられなかったのは残念であるが、だいたい戦闘の様子は同じようなものなので、「ひめゆり部隊」「鉄血勤皇隊」をえらび、それも重複している部分は割愛した。第一部には学徒隊の記録といっしょに、戦死した二人のわが子をしのぶ母の手記と、沖縄を守っていた軍人がどんな気持で沖縄の人をみ、沖縄戦を考えたかを伝えるために、その手紙をあわせてのせた。記録は五年ほど前に書かれたものだが、こんど新かなづかいにするなど少し手をいれ

ている。しかし遺書と感状は原文のままとした。

この本にのせたもののほかに「白梅部隊」(金城宏吉記)、「積徳勤皇鉄血隊」(津波古照子記)、
「梯梧部隊」(佐久真扶美子記)、さくまふみこ「瑞泉部隊」(久高友章記)、くたかともあき「護郷隊秘録―第三高女の生徒たち―」
「かわばたあつろう(川畑篤郎記)」、「白梅の香りは高し」(垣花初代記)、かきのはなはつよ「鉄血勤皇隊師範学校隊―見よ城頭の一
角に」(平仲孝栄記)、ひらなかこうえいなどがあつたが割愛した。ここにおわびしておきたい。
なお文中、字を下げて小さい活字で組んであるのは、編者の文である。

(小原 正雄)

目次

まえがき……………三

I 沖縄の娘たち

一 女子学徒隊の最期……………三

二 解散後六十四日間……………六五

三 「信子よ、貞子よ」……………八五

四 遺書……………一二八

II 沖縄の息子たち

一 一中の健児たち……………一二五

二	震天動地の戦い……………	一四〇
三	遺書……………	一六八
四	表彰状……………	一八〇
五	恩師の遺骨を抱いて……………	一八七

Ⅲ 学童たちも、住民も…

一	海底に沈んだ疎開学童……………	一九七
二	渡嘉敷島 とかしきとろ の戦闘……………	二二三
	あとがき……………	二三八

琉

歌

(沖繩の詩)

—伊平屋の老婆が詠める—

国のためと思て

咲ちゆる

(国のためと思つて咲いた

花散らち

花は散った

跡目失なたる

子供を失った

親ぬ苦りさ

親の苦しさよ)

思みば哀しさや

(思えばかなしいかな

十年ぬ昔

十年の昔

学び子ぬ姿

学生だった子供の姿が

忘れ苦りしや

忘れられない)

年や花盛い

(今年も花ざかりの

春節になてん

春になった

学問ぬなれや

学問したあの子も—生きていたら—

花や咲かん

花は咲こうに……)

沖縄群島の北部にある伊平屋島から、沖縄本島の中学に子供を留学させていた母が、沖縄学徒隊に加わって死んだわが子をいたむ嘆きの歌。「健児の塔」の納骨堂の板に刻んである。

I

沖縄の娘たち

いはまくら かたくもあらん やすらかに

ねむれとぞいのる まなびのともは

〔ひめゆりの塔〕より、仲宗根政善氏作〕

悲しさのあまり 井戸までかけたれど

水くみし子の あしあともなく

（金城ふみ氏作）

沖繩戦の死者と生者

一 女子学徒隊の最期

仲宗根政善なかそねせいぜん

筆者の仲宗根政善氏は、沖繩戦当時、女子学徒隊の引率者の一人として、最後に十三人の女子学徒とともに沖繩最南端の摩ま文仁ぶんに海岸で米軍に投降するまで、首里しゅりからその辛苦を共にした生き残りの一人である。そういう意味でこの手記は、太平洋戦争最後の悲劇といわれる沖繩戦と女子学徒隊の真実を伝える唯一の記録である。学徒隊解散後の別動隊については、それぞれのわずかの生存者の語るところをまとめて別記して完璧かんぺきを期している。後世に伝える記録というべきであらう。

昭和二十年六月二十二日、牛島満うしじまみつる沖繩軍司令官、長勇ちやういさむ参謀長は伊原東方いはらとうほうにそびえる沖繩最南端の摩文仁岳まぶんにだけで自刃して、沖繩戦は終末を告げた。

砲煙おさまった伊原野は人影もなく、生き残った兵も、米軍によって一定の地域に收容された。かくも凄惨をきわめた戦野には、幾万の屍が累々として風雨にさらされ、亡魂恨み泣き、身の毛のよだつ荒野となった。硝煙にこげた第三外科壕も、いつしか草が茂り、地虫が鳴いて、洞内はしづくが、屍にしたたった。

人びとは收容所から一步も出ることを許されなかった。親たちは娘たちがまだ洞窟にひそんでいるかと、神かけてその無事を祈っていた。

半年たった昭和二十一年一月、真和志村民は摩文仁海岸に移動を許された。全島に散在していた村民が、一カ所に集まり、抱き合って再会を喜んだ。真和志村民が米須に集合する二日前の一月二十三日、当時の糸満地区隊長ブランナー大尉は金城和信氏を村長に任命した。

金城氏は知念地区の学務課長を勤めていたとき、荒廃した野に鍬をいれる前に、まず戦野に伏している屍をていちょうに弔い、野を清めるべきであると主張した。それはすぐ実行された。米須一帯には兵隊、県民あわせて幾千の屍が、道ばたに、石垣のかげに、岩かげに、畑に、ころがつていた。金城氏は村長に就任するや、まず遺骨をあつめてていちょうに弔うことに着手し、「魂魄の塔」を建てて幾千の無名戦士の霊を弔った。

金城和信、ふみ夫妻は半年の間、ひめゆり部隊に参加した二人の娘信子、貞子のゆくえをさがし求めていた。とくに娘らが最期を遂げた摩文仁に来てからは、路傍にころがる屍を見ては、わ

が子の最期ではないかと心をいためていた。たまたま生存者の一人、伊良波文子看護婦が知念百名の病院に勤務していることを聞きつけ、三月の中ごろ、米須から百名までたずねて行った。

同看護婦を同伴した金城夫妻は、くさむらをかきわけて第三外科壕をさがしあてた。壕においてみると、すでに米軍によって壕内はガソリンをかけて焼かれ、娘らの遺骸は焼けこげていた。岩壁にはモンペ、万年筆、鏡、石鹼箱などが押しこんであつた。金城夫妻は娘の遺骸をさがすべもなく、ただ、ぼうぜんとして立ちつくし、

「信子よ 貞子よ いとし子よ

うちつれだちて いずこへゆきし」

と涙にくれた。

夫妻には、家を出るとき、「お父さん、お母さん、私たちの卒業証書は、靖国神社の入場券です。」とけなげに言い残して出て行った二人の姉妹の後姿が浮かび、靖国の御社にも祭られず、こうして洞窟にうずもれて行くのが悲しくてたまらなかつたにちがいない。

夫妻は、焼けこげてわずかばかり残った生徒のお骨と遺品を、一つ一つ拾い集めた。拾いあげた櫛のかけらにも、もしやわが子の名が記されていないかと気をつけた。焼けこげて残っていたもとどりを、身をふるわせながらしらべたが、見分けることはできなかった。お骨と遺品を持ちかえり、ていちょうに白木の箱におさめて、「浄魂」と清書して、これを引率者であつた私のものと